

令和元年5月14日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04763

研究課題名（和文）言語習得理論に基づく小学校英語教育のボトムアップ型学習モデルの構築

研究課題名（英文）Constructing a bottom-up learning model for elementary school English education on the basis of the language acquisition theory

研究代表者

菅井 三実（Sugai, Kazumi）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：10252206

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、2020年度から小学校5年と6年に「外国語科」が導入されるにあたり、英語の母語獲得に関する言語習得理論を援用して、日本の小学校英語教育におけるボトムアップ型の学習モデルを構築しようというものである。小学校英語への対応を考えるにあたり、中学校英語とのスムーズな接続という観点から、まず中学生に対し、基本動詞の多義、身体語彙、アクセントの違いを取り上げた上で、小学校児童に身体語彙を導入したところ、比喩的拡張を含めて十分に理解できることが確認された。全体の結論として、本研究課題の成果が一般的な小学校に十分に適応可能なことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、小学校に本格的な英語教育が導入されようとするときにあたり、英語圏における母語としての英語獲得のメカニズムに即した自然で無理のない指導法を構築し、外国語としての日本での英語教育に応用しようとするものであり、中学校英語と小学校英語のスムーズな接続を目指して実証的に検討を加えてきた。最終的に、本研究で実践した指導法が、必ずしも学力の高い学校でなくても十分に導入できる見通しを得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The present research is aimed to construct a learning model for elementary school English education in Japan, on the basis of the language acquisition theory, before introducing Foreign Language (English) into the 5th grade and the 6th grade in the 2020 fiscal year. After letting junior high school students learn polysemy of basic verbs, body words, difference in accentuation between English and Japanese, elementary school pupils are exposed to English body words, to prove that they are successful to learn the words as well as their metaphorical extensions. It is concluded that the present research results are fully informative for elementary school pupils to learn English.

研究分野：理論言語学

キーワード：小学校英語 言語獲得理論 比喩的拡張 身体語彙 メタ言語能力

1. 研究開始当初の背景

小学校の英語教育は、2020年度から小学校3年生と4年生で「外国語活動」が始まり、小学5年と6年で「外国語科」としての英語が教科として導入されることになっている。このような状況の中で、小学校英語教育に関する研究の動向として大きく2つのアプローチがあった。1つは「教育的アプローチ」ともいうもので、現状のように歌やゲームを中心に小学校英語を積極的に進めようという立場であり、もう1つは「語学的アプローチ」ともいうもので、語学研究的知見を理由に小学校英語に慎重な立場である。実状としては、第1のアプローチが主流になっていると言える状況であったが、本研究課題は、いわば第3のスタンスをとり、「語学的アプローチ」に立ちながらも、小学校での英語学習を肯定的にとらえ、小学校英語教育の高度化に耐えられる有効かつ実現可能な指導法を見出そうとするものである。

2. 研究の目的

本研究における全体的な目標は、英語の母語獲得に関する言語習得理論を援用し、日本の小学校英語教育におけるボトムアップ型の学習モデルを構築することにある。

当初は、小学校3年生と4年生に対する英語教育が始まることを視野に入れ、どのような準備的学習が可能なのかを明らかにすることを第一の目標に設定していたが、研究授業で協力してもらった小学校教員が校務で多忙となったため、このような場合に備えて事前に考えていた措置を講じることで対応した。すなわち、小学校から中学校への接続を視野に入れ、中学校におけるメタ言語能力の活性化を促すための研究的授業を展開した上で、如何にスムーズに小学校での英語教育を導入するかという観点から具体的な指導内容に検討を加えることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究課題では、小学校英語への対応を考えるにあたり、現在すでに行われてきた中学校英語の中で試行的に実施した上で小学校に適用するという段取りをとることとし、具体的には、基本動詞の多義・身体語彙・アクセントの違い・アспектを取り上げた。

最終的に中学校と小学校の両方で実践できたのは、身体語彙の習得であった。身体語彙は、実際の日常生活で広く用いられる上、言語学習においては優先度の高い語とされ、いわゆる基礎語彙の一部をなすものであり、言語学習において初期の段階で導入されることが望ましいとされながら、これまで体系的に学習する機会が設けられていなかった。特に身体語彙を取り上げたのは、身体部位を指示できるようにするとともに、認知言語学が注目してきた比喩的拡張の事例として、からだ以外にも日常の中の様々な場面で広く用いられることを学習できると考えられるからである。また、そのような多義現象が、英語だけでなく日本語でも同じように見つけられることを知り、母語としての日本語に対する理解を深めることが期待できる。このような身体語彙の汎用性と日常性を踏まえて、自らの周囲から事例を探しながら日本語と英語を複眼的に学習しようというのが今回の実践授業の意図である。

身体語彙の導入にあたって、言語習得の環境を考慮し、できるだけ視覚情報を取り入れるようにしたほか、記憶が離散的にならないよう体系的に理解できる形を心がけた。また、比喩的拡張を理解する能力を前提に、日本語と英語で拡張の事例を提示し、あらためて日本語を見つめ直し、母語の理解を深めることができるように努めた。

4. 研究成果

(1) 中学校での実践

小学校から中学校への接続を視野に入れ、中学校におけるメタ言語能力の活性化という観点から中学1年生と中学2年生のクラスで研究授業を展開した。内実としては、中学校における基礎語彙について、「コア理論」を用いて基本動詞の多義を学習することを試みた。コア理論は、社会人や高等学校レベルでは活用されているものの、中学校レベルでの応用は事例が少なく、今年度の実践授業は、その試みになるものと言える。当該の中学校は、必ずしも学力が高いとはいいがたいレベルにあり、本課題による実践授業は、繁忙期を避けて学期末に行われた。

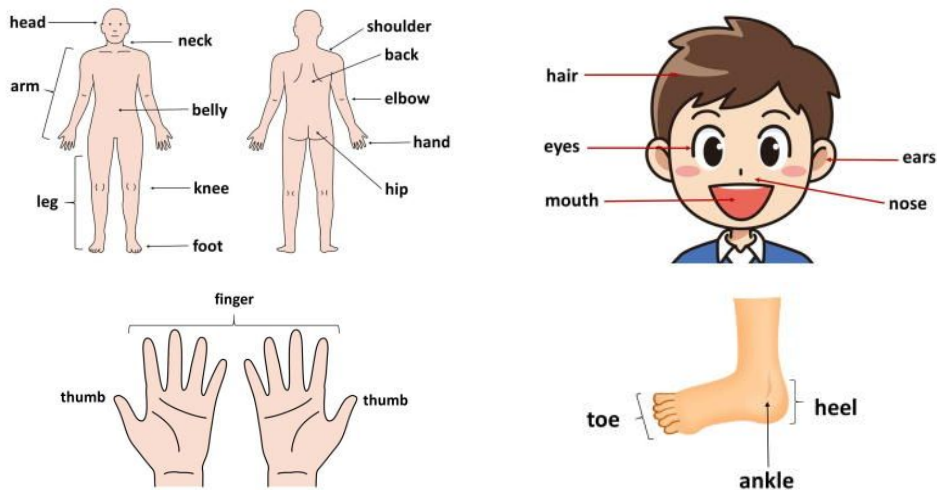
具体的に、本研究課題で導入した動詞の1つが基本動詞 have であり、中学1年生の早い段階で学習するものの、それゆえに固定的な訳語に固執する傾向が見られる。実際、中学校レベルの英語学習者は、動詞 have について、主語や目的語との意味関係を考慮しないまま「持つ」と一義的に関連づけている者が少なくない。そこで、コアの図式を用いて、I have two sisters. (姉妹が2人いる)や I have a dog. (犬を一匹飼っている)などの意味関係がコアによって一元的に表記されることを示すことで、「(ペンを)持っている」「(姉妹が)いる」「(ペットを)飼っている」「(昼食をとる)」「(宿題がある)」のような意味を英語の have で表せることが生徒たちに理解されるようにできた。

中学校では、基本動詞の多義のほか、身体語彙・アクセントの違い・アспектを取り上げた。これらは、おおむねすべての生徒に理解され、特に、身体語彙の体系的な理解に成功したことにより、小学校での実践に可能性を見いだすことが出来た。

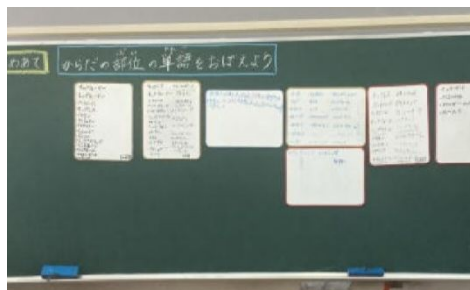
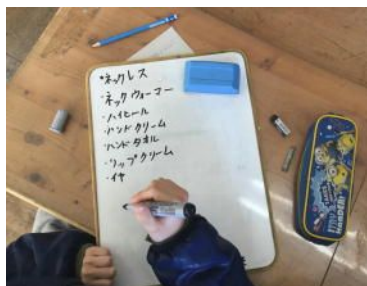
(2) 小学校での実践

小学校での実践授業は、5年生のクラスで、担任の教諭によって行われた。担任教諭は必ずしも英語科の免許を持っているわけではなく、一般的な教員であった。本授業の目的として設定したのは、(ア)英語の身体語彙をいくつ覚えたか、(イ)身体語彙が身体以外にも使われることがわかったか、(ウ)英語はカタカナ語の中にあつてすでに使っていたことがわかったか、という3点であった。この授業のための特別な配布物は用意せず、PowerPoint の画像を電子黒板に提示する形で進められ、全体として45分の授業が4つのパートで進行した。

パート1では、全身の身体語彙が英語で提示された。具体的には、全身図を提示しながら hair, head, face, eye, nose, ear, lips を示した上で、部分図により finger, thumb, nail を提示した。



このとき、「日本語で言うと、指は何本ありますか」という問いに対し、児童から「10本」あるいは「20本」という反応が見られた中で、「英語で finger は8本しかありません」と説明し、親指と足の指に別の名前がつけられていることを説明した。さらに足部図により、toe, heel, ankle を示した。パート2は活動時間で、身体語彙の入った外来語を探す活動を行った。班に分かれて相談し、順次、ホワイトボードに書き込み、それを教室前方の黒板に貼り付けて、クラス全員で検討していった。



パート3は、英語の身体語彙が身体でないところにも使われることを学ぶ時間とした。いわゆる比喩的拡張の事例を示し、mouth of a bottle(瓶の口)や mouth of a cave(洞窟の入り口)あるいは hand of a clock(時計の針)などのように身体の一部が別のものに使われる例を挙げた。



最後のパート4は振り返りの時間としたが、その感想を見ると、初めて学ぶ内容であったにもかかわらず、視覚資料を多用した平明な授業構成であったことが奏功し、英語の知識を深めるのに有用であったように思われる。

(3)縦断的考察

学習者の校種を小学校から中学校に上げることによって、小学校と中学校の両者を見渡すことができた。中学校での研究授業で取り上げた身体語彙は、必ずしも中学で網羅するよう配置されていないが、head, face, mouth, hand, arm など、いずれも自らの身体に内在された部位であって、指示対象を理解するのに困難さのないものである。実際、身体語彙は小学校英語でも取り上げることが可能なほどで、この点に、小学校英語との接続の可能性を見いだすことができると思われる。結果的に、中学校での実践の機会をもったことで、小学校と中学校の連携ないし接続に具体的な観点を得ることができた。全体の結論として、今回の実践授業は、本研究課題の成果が一般的な中学校で適用できることがわかっただけでなく、一般的な小学校に十分に適応可能なことを示唆するものであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

菅井三実(2019)「言語獲得理論に基づく小学校英語教育の実践研究」児玉一宏・小山哲春[編]『認知言語学の最前線 山梨正明教授古希記念論文集』ひつじ書房。

八木橋宏勇(2019)「英語ライティング指導におけるテンプレートの活用 日英語の好まれる
談話展開とその内在化」『杏林大学外国語学部紀要』31:197-209.

〔学会発表〕(計7件)

八木橋宏勇・多々良直弘ほか(2017)「日英語の論理的表現方法と学習者の理解度」日本英語学
会第35回大会ワークショップ.

金丸敏幸(2016)「人工知能による長期的スピーキング能力測定」2016年度大学英語教育学会
関西支部秋季大会ワークショップ.

〔図書〕(計4件)

辻幸夫(編集主幹)・吉村公宏・堀江 薫・楠見孝・野村益寛・菅井三実(編集)(2019)『認知言
語学大事典』朝倉書店.

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：辻 幸夫

ローマ字氏名：TSUJI YUKIO

所属研究機関名：慶應義塾大学

部局名：法学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：10207368

研究分担者氏名：金丸 敏幸

ローマ字氏名：KANAMARU TOSHIYUKI

所属研究機関名：京都大学

部局名：国際高等教育院

職名：准教授

研究者番号(8桁)：70435791

研究分担者氏名：八木橋 宏勇

ローマ字氏名：YAGIHASHI HIROTOSHI

所属研究機関名：杏林大学

部局名：外国語学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：40453526

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施
や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解
や責任は、研究者個人に帰属されます。